

## 約束を守るといふこと

宏池会会長就任直前に「如水会々報」に寄せたエッセイ。日米経済関係の緊張を打開するには明治、大正の先輩のように約束したことを実行するのが大切だと説く。

一九六三年の夏のことであった。アメリカ連邦政府は国際収支の悪化を防ぐ一環として、利子平衡税の創設を発表した。これはアメリカ人の対外投資の生む利子に対し、連邦政府が一部の税を課すというものであった。日本ではこれによりアメリカからの外資の導入が頓挫すると当面の国際収支の維持に困難が加わるにちがいない。また本格的な成長期にさしかかった日本経済の運営が危くなる。それかあらぬかこの報に接した株式市場は、ダウ平均三十円方の暴落を記録した。この状態を心配した池田首相は、外相の私に、急ぎ渡米の上アメリカ当局にかかる企てを取止めるようかけ合い、それが不可能な場合はカナダと同様、日本をこの措置から除外するよう交渉せよと命じた。私は直ちに渡米し、ケネディ大統領、ディロン財務長官、ラスク國務長官等に会い、その旨再考を求めた。しかし結局その措置は実行に移され、日本政府の発行にかかる国債だけが除外されるに止った。

私は、ワシントンからの帰途ニューヨークに立寄った。ニューヨークではシテイの首脳十四人が私

を昼食会に招いてくれた。シティの首脳と言えば世界一流の金持だ。先ずどんな服装をしてくるか、どんなご馳走をしてくれるかに私の好奇心がかすかに動いた。ところが、彼等の服装は何の変哲もない平凡なもので、靴なども相当疲れている有様である。ご馳走と言えば、日米両国の小さい国旗を交えてさした一品料理で、まるでデパートでよく見るお子様ランチを一寸高級にした程度のものであった。私は、その飾らないもてなしにむしろ好感を覚えたものである。

その席上、私は過去百年間、太平洋には快晴の日ばかりでなく、風浪の高い時もあった。戦火を交えた時さえあった。しかしその間、貴国は日本を信頼して巨額の投資をされ、日本もその近代化をなしとげることができた。その友情と信頼に心から感謝の意を表明したい。今、偶々、利子平衡税という暗雲が快晴の空の一角から姿をのぞかせておるが、これとてもそう長くは続くものではあるまい。やがて、快晴の日が訪れることを確信しておる、という意味の挨拶をした。

挨拶を終って私が椅子に腰をかけると、私の隣にいたホーストが「大平さん何も心配する必要はありませんよ。お国の国際収支がピンチを招くようなことがあれば、私の銀行からだけでも七千万ドルや八千万ドルは直ちにご用立てする用意がありますよ」と耳打ちしてくれた。その時、私は異郷の空で本當の友情というものを感ずると同時に、われわれの多くの先輩の足跡を回想したのである。

われわれの先輩は明治から大正にかけて随分、大胆に外国とりわけアメリカから金を借りたものである。しかし、戦時中と戦後の或時期を除いて、その約定にたがいなく期日には元利共きちんと支払ってくれた。その間に培われた信用というものが、今日の日本を支えてくれておるのだということをしみじみ感じたものである。

今日、日米経済関係が緊張の度を加えたことを心配する向がある。ニクソン氏がいうように渡洋二

国間貿易では、有史以来空前の記録を打立てた日米両国である。両国の経済関係に問題が多いのはいわば当然であり、時にそれらが緊張の度を増すことがあっても別に不思議ではない。ただその底に約束は守るといふ極めて平凡な相互の信頼関係さえあれば、現に見る緊張は漸次ほぐされてくるにちがいないと思う。大切なことは緊張打開に色々な術策を弄するよりは約束したことはこれを実行する、実行できる自信のないことは約束しまいという不動の姿勢を貫くことの方が大切であるように思われてならない。

## 奇妙な地図

第三代宏池会会長に就任直後に執筆したエッセイで、物理的な地図のほかにGNPとか情報とか機能別の地図による発想の転換を提案している。

ライシャワー前駐日米大使が、ボストンに帰任されてから既に久しいが、折に触れ懐しく思い出される人である。日本に生れ日本人を妻とし、日本の歴史や風物に深い愛着と理解をもたれた心の優しい学者である。今でも毎日、米の飯とみそ汁は欠かされないし、おもちは好物であるという。専門は東洋史であるが、政治や外交にも立派な見識をもち、数々の事蹟を残された人である。

そのライシャワーさんがまだ東京で大使をしておられた頃のことである。偶々米大使館を訪ねた私に、ラ氏は得意そうな微笑を浮かべながら、書齋から奇妙な一枚の地図をとり出してきた。その地図は、奇妙というよりはむしろグロテスクなもので、アメリカや欧州は地図の全面に広い紙幅を占めておるが、アフリカ、アジア、南アメリカ等は、欧米の巨体にぶらさがる小さい尻尾のように申请的につけ加えられていた。つまりそれはGNPの大きさを地図の平面にひき直したものであった（暫らくして、この地図はある日本の雑誌に紹介されたようだ）。

私はその地図を見てその着想を面白いと思った。地図というものは、これまでのように、物理的な空間の拡がりを示すに止まらないで、機能別に幾らでも作れるし、また作る必要があるのではないかと思つた。例えば航空、航海又は地上の走行等に要する時間で作ることもできるし、特定の物資の運賃によって作ることもできる。更にはGNPの大きさの代りに知識や情報の分量とか、中枢管理機能の大小によつても作ることができるとある。むしろ機能別に色々な地図を作つてみるのが、われわれのもつべき世界像というものを、より真実に近いものにするのに役立つのではないかと思つたのである。

そうは言つても、人間というものは、惻口そうに見えて案外愚かなものである。子供の時から学んだ地図によつて形成された世界像の呪縛から、容易に解放されないものであるようだ。交通や通信は近來著しい発達をとげ、世界の姿も一変した。それなのに政治経済その他人間の営みは、そうした変化に必ずしもついて行つていない怨みがありはしないか。このことを手近なところで見してみよう。

わが国の面積は三十七万平方キロといわれ、その人口や経済規模に比し著しく小さい。しかもわれわれの経済活動は原則として平地で展開されるが、日本の平地は全国土の一六パーセント程度に過ぎない。それはソ連の百分の一にも満たず、アメリカの五十分の一にも足らない。

だから日本の平地は、極めて集約的に利用されなければならない。ある学者の推算によるとわが国の平地の利用度は平均してアメリカのその十倍に上るといふ。それでいてその利用が著しく偏つてゐる。全国土の百分の一に満たない市街地に全人口の約半分が住み、太平洋ベルト地帯に全人口の六割以上が、交通や公害その他人口の過密のもたらす諸問題の異常な緊張の中に生きてゐる。ところが一方には太陽と緑に恵まれた集落や村の多くが、解体離散の憂目を見ている過疎地帯が同居してゐる。

出稼ぎの人々にまつわる悲劇も今尚跡を絶たない始末である。それは要するに人間のもつ惰性に加うるに、雇傭その他経済の機会が局地に偏在しておる結果であるように思われる。しかしより正確に言うならば、経済の機会が局地に偏在しておるにちがいないという意識が生んだ結果であるといえよう。今日われわれは自動電話で全国到る処に即時通話ができる。海陸空の交通機関は急速に発達し、いわゆる経済距離は大幅に短縮した。われわれは最早、人力車の時代に形成された日本像に捉われていなくてもよい筈である。ところが廃藩置県の時そのままの府県制を今尚大切にしておるように、われわれは東京や大阪に出なければ経済の機会を掴むことがむづかしいと考え勝ちのようである。ところが交通通信の発達は、近代技術とそのシステムの活用によって益々加速化してきた。経済距離はそのため愈々短くなり、情報の伝播と整理は、コンピュータの導入と相俟って事実上、時空を克服しようとしておる。ここらあたりで、これまでの日本像から脱却した眼識で、政府も民間も、日本の国土利用の在り方を、根本的に考え直してみる必要があるのではなからうか。

それがあらぬか政府も、新全国総合開発計画の策定にとりかかり、一昨年春にはそのスケルトンを発表した。それは北海道、本州、四国、九州の四つの島全体を、一貫した政策の対象とするもので、新産業都市や工業整備特別地域更には低開発地域の開発計画や離島振興のような局地的なものではない。そのためにまず交通、通信の幹線網の全国的な整備を自論み、それを軸として日本人の生活と産業と文化に一大新生面を切り開こうとするものなのである。私はそこに示された壮大なヴィジョンと、それに対するアプローチの手法が、国民の理解と協力を得て、目標とする昭和六十年を待たずに、着々具体化することを希求しておる。勿論この計画には、色々な不備や注文があるのが、新しい日本像に根ざした野心的な試みとして、私はこの企てを高く評価したい。

## 轉換期の自覚

大蔵大臣時代、終戦記念日にあたっての所感の一端を述べたもの。現在を戦後、初の大轉換期として捉え、国民的な自覚の必要性を説く。

二千五百年前のヘラクレイトスに万物流転説というのがある。一般には明日の世界は今日の世界とは全く異なるという意味に理解されている。ところが戦後の世界の動向は、流転説の主命題にあるように戦いは万物の父、万物の王、全く流転説にいうところと似通ったような筋道を辿ってきているように見える。しかし、対立相克による発展が、このイオニストのいうようにロゴスによって全体的に調和のある姿に纏めあげられてきたとは到底いえない。少なくとも極めて最近に到るまでは、世界は戦後多くの矛盾を含み、残滓を吐き捨てながらも急速な物質面での拡大を実現してきた。この速度と規模は、驚嘆に値する。

私が高松高商に在学していた頃は、既に昭和のどす黒い思想破綻の波頭が次第に高まりつつあった時代ではあったが、実社会の変革は未だしで、自然もまたふるさとのノスタルジアをはぐくむに足る麗しいものであった。幾星霜は、矢のように流れ去った。爛漫の春には桜が薄くれないの花吹雪を散

らし、肅々の秋には銀杏が黄熟の厚化粧をしていた。小川は常に清らかで、町並みは年輪の堆積の下に静かに踞まっていた。

しかし今は違っている。世界が歴史的に断層的な大変化を遂げた。最近の百年間で物質社会の飛躍は月世界にまで伸びた。同じ速度で縮減化をたどると、次の一年間の変化は過去百年間の変化にも等しくなるかも知れない。これは恐ろしいことである。このように時間が極度に縮減しつつある社会では、異った思考や行動の軌範と形式が数多く氾濫し、大きなひずみや不均衡がもつれあうことになった。進めば進むほどロゴスの調整はますますむづかしくなってくるであろう。

戦後のまっしぐらの拡大と前進は、人間の生活を大きく変えてきた。これは同時に堪えがたい矛盾としこりと偏差を生んだ。これからの社会は戦後の目覚ましい前進と拡大に対して、安定と調整を練り直す社会でなければならぬであろう。

ヘーコンは『新オルガノン』で真理の見極めの前提として、先入観と経験の束縛に基づく四つのイドラ（幻影）を排除することを主張した。戦後、特に最近の社会で最も重要な課題は、この実験哲学接近への前提的示唆である経験的イドラを排除する価値革命又は意識革命であった。しかし、現在では却ってこのイドラに郷愁を抱く人間生活への反省が取り上げられねばならぬ時代になりつつある。

拡大と前進は必ずしも発展と向上を意味しない。社会的矛盾が増幅し、人間の自由が押しつぶされ、生活環境が汚される惧れが多くなってきた。ここで前進や拡大の方向、その内容や速度等を反省して見ることが何よりも大切な問題になってきた。しかもこれは我々全部に対する課題である。

民衆の声は神の声、という有名な言葉がある。本当は民衆の声はそのままでは神の声ではない。同時に、その声は神の声だけで止まるべきでもない。国民の声を完全な神の声にし、その声を実現する

ための政治がなされなければならない。政治を担当するものは固より主体的な脊椎を持っていないければならない。しかし、個々の見解を押しつけることは政治本来の姿にもとる結果を生み出すことになる。国民の声を、良識と英知と情感に満ちた声に纏めあげ、その希求を実践に移すことが政治本来のあり方であろう。

現在は戦後のいちづの早駆けを振り返って、人間自然の幸福を再発見しようと考えている時代に入っている。これは僅か数年前に強い要請として世界的に現われてきた現実であって、大戦後の最初の大転換期といえよう。

人間は時の流れに棹さすものであるが、その流れを造り出すものもまた人間であって神ではない。新しい社会変革を前段階との節目でどう立派に纏めあげてゆくかは、その時代に生きる総ての者のかかるといふ仕事である。

日本は世界の潮流の中で、何時でも洪水の飛沫を多く浴びる国柄である。しかし戦後の大きな拡大の地馴らしを行ない、これを高い発展の結末にもち来る者は現在に生きている我々である。安定した均衡と秩序のある自由を実現するためには、この転換期における国民的又は人間的な自覚が何よりも必要であろう。

## 橋畔随想 保守の哲学

幹事長時代、「保守の危機」が叫ばれているなかで、国民の価値観の多元化に因應するための「未来と過去が緊張したバランスの中にあるように努めていく健全な保守主義」の重要性を力説する。

先日、妻を連れて墓参りの帰途、国立の母校を訪れた。図書館にあるわが国商業英語の鼻祖プロックホイス先生の胸像の下に刻まれている、ゼミナールの恩師、上田辰之助先生の碑文を、日本経済新聞の「私の履歴書」欄にご紹介しようと思ひ、それをもう一度確めたかったからである。

上田先生の碑文は、プロックホイス先生の貢献と、一橋の学校としての使命を次のように簡潔に記している。

"His was a mighty workshop in which he devoted his life to the training and equipment of the men who won for Japan autonomy and distinction in her commerce with the world."

この碑文からもわかるように、日本の貿易は過去百年間、F・O・BからC・I・Fへの歩みであり、国際収支の恒常的赤字からの脱却の道であった。一橋の先輩たちは、そのために血のにじむような努力を重ねてきたのである。国際収支が赤字になれば、国内経済を引締めて国際収支の回復に努め、

国際収支に余裕ができて、用心深く経済の拡大に努めた。その結果、ついこのあいだ、日本は漸くにして資本輸出国になることができた。その途端に、日本は大幅黒字国として国際的批判にさらされることになったのである。まことに時の移り変わりの激しさは目を見張るばかりである。

時の移り変わりといえば、戦時中に愛読した田辺元先生の哲学書の中に「時間というものは今しかないのである。過去や未来は現在に働く力であつて、時というものには現在しかない」という意味のお言葉があつた。近時、「保守の危機」ということがいわれるが、「過去を捨象すると革命になり、未来を捨象すると反動になる」というのが田辺哲学の教えているところだと思ふ。現在は、未来と過去の緊張したバランスの中にあつて、革命であつても困るし、反動であつてもいけない。未来と過去が緊張したバランスの中にあるように努めていくのが、「健全な保守」というものではないであらうか。私は保守主義をこのように考えている。

いま国民が望んでいるのは、「いまの経済を早く軌道に乗せること」と「つまり、現在は我慢がならぬ。現在は不都合だから、これを正しい軌道に乗せ得ない政治は許せない」ということであらう。しかし、私は、「果して現在の状態はそれほどつまらない状態であるか」を、もう一度よく考えてみる必要があると思ふ。われわれはこれまで、現在を生むために血と汗を流した。現在はそうした丹精の結果である。このことをまず考えなければならぬ。

それ故、私は、政治の無力さを感じながらも、現在の状態をもたらした責任を、挙げて政治にもつていくことには多少の抵抗感を覚える。というのは、われわれは、この現在の状態を多くの可能性の中から一番よいものとして選択したはずだからである。

もちろん、現在を漸進的によい方向に向かつて直していく努力は重ねなければならぬが、とにか

く抽象や飛躍に走ったり、逃避したりすることなく、巧みにバランスをとりながら、現実在即して手固く政策の選択をしていくのが健全な保守なのである。

よく「西ドイツの世論は政府に甘い。日本の世論は政府に辛い」といわれるが、果して日本の政治は西ドイツに比べて劣っているかといえば、必ずしもそうではないであろう。それぞれの国民によってその国の政治の評価は異なるのであって、一概にどうということはいえないと思う。また、政府に対する世論だけから政治を評価するのは適当でない。

ともあれ、いまの時代の政治は、これまでのどの時代の政治よりも難しく、評価もよくないように思われる。その最大の原因は、国民の価値観が多元的になったため、その全部を個別に充足させてやれなくなっているところにある。これは体制のいかんを問わずいえることで、いずれの体制下でも世論をまとめることは至難のわざになっている。

要は、政治が毅然とした態度で時代に対応できるかどうかである。

日本は、これまで民主主義のやり方で曲りなりに成功してきたし、議会主義も何とか定着してきた。経済についても、市場経済のやり方が無難であるという考え方が熟してきたし、巨額の防衛費も使わないで国の安全を保障することにも成功してきた。

政府の仕事は、まず、このような「大きな基盤を守る」ことである。その上に立って、経済界はじめ各界は分別をもって現実に対応するのである。政府は経済界などできないこと、例えばカタストロフィ的な状態を回避することをする。これこそ政府でなければできないことである。そうした経済と政治の究極のかかわり合いを考え、政治の限界を思いつつ、現実に対して有効な手を打つことが肝要である。

それにつけても、経済と政治のかかわり合いを考える上で、私は一橋という学校に学んで本当に良かったとしみじみ思う。また恩師、先輩、親友に恵まれ、幸福である。私は昨年、衆議院議員在職十五年の故をもって、院議により表彰された。政界に出て何とかここまでこられたのも、一橋の恩師、先輩、同輩、後輩の皆様のお蔭であり、心から感謝に堪えない。